園田茂人 教授/园田茂人 教授
東京大学東洋文化研究所/东京大学东洋文化研究所
北京日本学研究センター 日本側主任/北京日本学研究中心 日方主任

編集者より：園田茂人教授は、北京日本学研究センターのみならず、「東アジア日本研究者協議会」や、当基金の近年の取り組みである「次世代日本研究者ワークショップ」、ウェブページ「アジア・大洋州の日本研究事情」作成などの事業を通じて、中国の日本研究や日本研究の国際化の取り組みに深くかかわってこられました。このインタビューでは、個人の研究者としての歩みのほか、こうした取り組みを通じて感じられたことなどについてもお伺いしました。
编者按：园田茂人教授不仅作为日方主任教授主持北京日本学研究中心的工作，同时他还通过参与“东亚日本研究者协议会”、本基金会近年来主推的“下一代日本研究者工作坊”以及“亚洲・大洋洲的日本研究”网页的制作等事业，积极投身于推动中国的日本研究和日本研究国际化的发展。在此次采访中，园田教授除讲述自身作为研究者的学术经历以外，也谈及了参与上述各项事业的感想。

各事業の概要については、以下のページからご覧いただけます。/关于各项事业之概要，请浏览下列网站。
○大平学校から北京日本学研究センターへ（JF50 周年記念ウェブサイト）/从大平班到北京日本学研究中心（日本国际交流基金会成立 50 周年网站）
https://jf50.jpf.go.jp/story/platform-of-japanese-studies-open-to-the-world/
複製・編集を禁じます
○北京日本学研究センター事業（JF 公式ウェブサイト）/北京日本学研究中心事业（日本国际交流基金会网站）
https://www.jpf.go.jp/j/project/intel/study/support/bj/index.html
禁止复制编辑文稿内容
○「アジア・大洋州の日本研究事情」/“亚洲/大洋洲的日本研究”网页
https://www.jpf.go.jp/j/project/intel/study/overview/index.html
○次世代日本研究者協働研究ワークショップ/“下一代日本研究者工作坊”
https://www.jpf.go.jp/j/project/intel/study/network/workshop/index.html

::

日　時　：2022 年 7 月 7 日
場　所　：国際交流基金本部（東京）
使用言語：日本語
聞き手　：金子聖仁
（国際交流基金日本研究部事業第 1 チーム）

时　间　：2022 年 7 月 7 日
地　点　：日本国际交流基金会总部（东京）
使用语言：日文
采访者　：金子圣仁
（日本国际交流基金会日本研究部事业第一课）

::

【目次】
１．研究者としての歩み
(1)中国語学習と中国研究のきっかけ
(2)社会学と中国研究
(3)教育と研究の関係
２．中国の日本研究について

【目录】
１．研究者之路
(1)学习中文与研究中国的契机
(2)社会学与中国研究
(3)教育与研究的关系
２．关于中国的日本研究

３．国際交流基金の事業に関わって　　３．参与日本国际交流基金会的工作
(1)「次世代日本研究者ワークショップ」　　(1)“下一代日本研究者工作坊”
(2)「東アジア日本研究者協議会」　　(2)“东亚日本研究者协议会”
４．今後に向けて　　４．关于今后
５．国際交流基金への期待　　５．对日本国际交流基金会的期待

【本文】

１．研究者としての歩み/研究者之路

(1)中国語学習と中国研究のきっかけ/学习中文与研究中国的契机

1980 年に大学に入って、中国語を勉強しようと思った理由は簡単です。世界中で一番、中国の人口が多い。しかも改革開放になって、ちょうど国が開き始めた。「これはビジネスチャンスだ」。これだけだったんですね。

入学時にはクラスが全部で 8 つか 9 つあって（注：東京大学では第二外国語によってクラス分けがされる)、その多くがフランス語。次がドイツ語で、中国語は 1 クラスしかなくて 53 人。それでもロシア語よりは規模が大きいといった感じでした。ロシア（注：ソ連)、中国は、ある時期まで冷戦体制下で敵性国と見なされていたので、我々の先輩が就職活動をやろうと思っても、思想信条を調べられたとか、そういう時代でした。ただ 80 年代の中国は改革開放に舵を切っているので、中国語を学ぶだけで「こいつ何者だ？思想的に左翼か？」って感じはありませんでした。(中国語を選択する学生は）今もそうですけど、「漢字だったらどうにかなるかな」といった安易な考えをもつ者と、ガチで東洋史や東洋思想を専攻したい者などによって構成されていました。(後者は）当時主流だった知的雰囲気に抗うというか、英語を使う学術とは別のことをしたいと思っていた者が多く、東洋やアジアに関心がある連中が中国語を選択していました。ですから中国語履修者は増えていたものの、今のような広がりはなかった。私の学部時代はそんな感じでした。

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

大学 3 年の冬に、私の指導教員（注：富永健一教授）のところに北京大学から初めて社会学を専門にする留学生がやってきて、(指導教員から)「そういえば園田君、中国語をやってたね。チューターやって」って言われてから、研究にずるずると入っていきました。留学生が来た時に、「あ、これから中国の時代が来る」と、直感的に思いました。(それまでは）父の仕事を継ぐのかなって思っていましたが、父の仕事は建築なので、海外に行くことなど考えられなかった。ですから、中国語を学んだ先の「将来」は見えてなかった。気づいてみたら留学生がいて、話をしているうちに、「あ、なんか面白そうだな」と。今考えれば、大変甘い考えで大学院入試を受けたと思います。

その先生が南開大学の社会学系に招聘され、(私も）大学院の修士の一年の時に先生と一緒に中国に行って、その経験が今の私を作りました。1984 年のことです。説得力がないのはよくわかっていますが、たまたま留学生が来たっていうのが（中国を研究するようになった）動機ですね。

(2)社会学と中国研究/社会学与中国研究

学生諸君に「どんな人生を歩むか」といったテーマで話をする時に必ず触れる点なのですが、なんで私がこうした人生を選択したかというと、多分に性格と関係していると思います。私は、みんながいるとこ

ろには決して行かないタイプの人間です。へそ曲がりと言ったらいいのか、ビジネスチャンスに敏感だったといったらいいのかわかりませんが、みんなが群れているところには、基本いかない。

社会学は基本、西洋言語の世界です。西洋言語を学んで日本を研究対象とするというのが基本パッケージなんですね。でも「待てよ、それと違うところにお宝があるはずだ」って思っていました。

（当時）社会学者は、世界を見回しても、中国社会をほとんど理解していなかった。当時、ほぼ唯一といえるのはエズラ・ボーゲル（Ezra Feivel Vogel）さんぐらい。ボーゲルさんの弟子筋から多くの中国研究者が輩出されますが、当時はまだそうなっていなかったこともあり、「社会学の知識と中国研究を合わせたら新しいことが起こる」と、なんとなくそう考えていました。ただ、自分ができるとは思ってないし、何をしなきゃいけないかもわからない。

実際、私が中国研究に着手し始めた頃は、いろいろな制限がありました。農村に行きたいといっても、当局から許可をもらわないといけません。しかも許可は基本下りないので、調査はできない。となると、「自分ひとりの力じゃ無理だ」といろいろ考え、こっちが日本で偉くなって、中国人の友達が偉くなれば一緒に作業ができるんじゃないか。彼らにないものがこっちにあって、こっちにないものが彼らにあれば、意義ある協働研究ができる。そんな研究上のロジスティクスを考えるようになりました。そして研究費を取ったり研究計画を立てたりすることで、だんだんやれることが増えました。事実 1990 年代の後半から、中国社会を研究する機会が増えていきました。ですので、最初は苦しかったものの、チャンスが増えていくという点では、いい時代でしたね。

ただこれも後に、外国人の私と協働研究をする動機が中国人側になくなっていきます。中国で社会学研究が発展するからです。そこで「わかった、あなた方は自分たちの研究をやればいい。私は自分のような人間だからできることをする」と考えを切り替え、彼らでは手が届かないことをしようと思いました。彼らは中から中国を見る。じゃあ、外から中国をみたらどうなるかという問いを立てたら、私は彼らよりはいい研究ができるのではないか。こんな具合に、絶えず変わる中国に困難と機会を同時に見つけてきました。苦しいことと楽しいことは、ほぼ表裏一体で進んできたといってもいい。しかも、その苦楽は時代とともに変化してきた。そんな感じですかね。

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

(3)教育と研究の関係/教育与研究的关系

私自身、研究と教育をうまく結びつけられようになったのは 21 世紀になってからです。1990 年から中央大学の文学部で社会学を教えていたのですが、社会学を教えている限り、アジアや中国を教える必然性がない。そのため、自分の研究は自分だけでやり、教壇やゼミでは学生が自分たちの身の回りのことを研究テーマにするよう指導し、いいところに就職して「良かったね」っていうのが 1990 年代です。

社会学を教えていながらも、学生が海外、特にアジアや中国に関心も持ち、実際に接触して互いに学びあえる環境が出来たのは 21 世紀に入ってからです。ある時ゼミの指導学生が、「先生は、自分の専門を全然ゼミで語っていない。中国で何かやらないの？」というので、彼らを香港連れていき、現地の学生と共同研究をする「海外ゼミ」が始まって、研究と教育とが結びつくようになりました。2020 年に出版された『アジアの国民感情』（園田茂人著、中央公論新社）は、その典型例ですが、ある段階から、学生と一緒にすることから研究を構想するようになり、教育から研究が生まれるようになります。最初のうちは社会学というツールでアジアや中国を理解させることはむずかしかったのですが、中国のプレゼンスが大きくなり、日本で社会学を学ぶ若者も中国を知りたいと思うようになりましたし、何より中国自身

が世界との結びつきを強めるようになりました。それで、研究と教育がくっつくようになった。このように時期によって、研究と教育のつながり方はだいぶ違っていました。

２．中国の日本研究について/关于中国的日本研究

中国人研究者は、日本語の、特に文献を読む力が非常に強いです。しかも、例えばお茶を通じた文化交流といった話になると、中国語の古典を読む力も必要なので、中国人研究者の方がずっとアドバンテージがある。「こういう能力は中国系の研究者しか持ってない」というような領域があるという点で、中国の日本研究のユニークさがあると思いますね。つまり、一つは語学の問題。

二つ目は、例えば日中戦争のように、日中の関係が持っている世界的な意味合いが大きく、多くの海外の研究者たちも知りたいけどそこまで知れないという領域が、たくさんある点です。世界の研究者で日本語と中国語を両方理解し、当時の状況や戦争をしっかり記述できる人は多くない。ところが中国の日本研究者は、こうしたことは比較的容易にできる立場にあります。これが二つ目。

そして最後のポイントですが、これは最近、東洋文化研究所が立ち上げた「グローバル・エイジアン・スタディーズ」の発想に関係します。中国の日本研究の場合、外にある研究を中に取り込み、咀嚼して自分たちの丈に合うようにしていくという「現地化」、つまり「アウトサイド‐イン」の知の流れが強かったように思います。特に北京日本学研究センターは、日本人の日本研究をしっかりと受け入れることを重要なミッションとしていたので、研究者にもそうした特性・態度が見られます。ところが他方で、世界の日本研究への貢献、つまり「インサイド‐アウト」もしないといけない。

先ほど戦争研究の事例に触れましたが、広く世界中で戦争をテーマに研究する人たちが、日中戦争を理解することよって多くの学びがあるのが理想です。しかしそこに行きつくためには、中国の日本研究者が日中関係を理解するだけでは足りない。海外の日本研究、日本研究以外の海外の研究とどう結びつけるかといった発想が必要になります。

まだ、中国の日本研究はそのレベルにまで達していないように思うのですが、注意したいのは、中国の日本研究と中国「人」の日本研究は違うということ。「中国の日本研究」となると、どうしても中国の国の中の研究を見てしまうのですが、実はアメリカやヨーロッパを拠点に日本を研究している中国人研究者が相当数います。そういう人たちは「インサイド‐アウト」、自分たちのやってることを他国の違う研究者にも理解してもらい、より普遍的なメッセージにつなげたいという動機を持っています。そういう人たちも中国の日本研究の隊列に入るようになると、知の生産がスムーズに行われるし、いろんな人の協力によって誰も手が届かなかった部分に手が届くようになる。

中国の日本研究は、今ちょうど世界の日本研究を作っていくとば口にいて、いろんなことをやろうと構想はしてるけどできない、でも数歩歩き始めると、そういうことができるようになる、そんな状態にあるように思います。

例えば私が東文研でプロモートしている「グローバル・エイジアン・スタディーズ」では、アジアの日本研究と日本のアジア研究の対話を謳っていますが、これを直感的に「それはすごく意味のあることだ」とわかる研究者は、そんなに多くありません。「今までの研究のどこが悪いのか。今までの研究を守るだけでも大変なのに、新しいことやるのは大変だ」といった姿勢は、世界中で広く見られます。英語圏の日本研究をリードしてきたバークレーや UCLA のようなところの日本研究を見ていると、確かにある種の

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

型は出来上がってきているものの、もう一つチャレンジが欲しいといった感じがする。例えばアメリカの日本研究は、アメリカにひきつけた日本研究になりがちで、その場合の「日本」はすごく狭い。もう少し広い、例えば「アジアの中の日本」といった視点は、アメリカだけで日本研究をやっていてもなかなか感得できません。同じことが中国にも言えて、「インサイド‐アウト」するためには、「こういうことに気づかないといけない」といったステップがあります。そのステップを踏まずに海外の研究者と付き合っても、なかなか成果が生まれない。成果が生まれるには、研究者のマインドセットが変わってこないといけないからです。

その意味で一番効果的なのは、「次世代日本研究者ワークショップ」のような若者を対象にしたワークショップをやること。それに先生たちが引きずられて、先生同士が袖触れ合って、「あなたはどんな研究をしているのですか」といった問いから始まり、「あ、だからこういう研究をしているのだ」と腑に落ち、そこから協働研究が出来、成果が出始めて、その数歩が形として残るからです。

しかしその「腑に落ちる」プロセスがないと、「シンポジウムやりました」「講演会やりました」って言っても、その時々の記録は残っても新しい研究が生まれてくるか、「インサイド‐アウト」ができるかといえば、なかなかできない。特に、国が広く学術マーケットが大きい地域であればあるほど、ガラパゴス的な状況に陥りやすい。その意味でも、さっき言った「数歩」が必要です。

3．国際交流基金の事業に関わって/参与日本国际交流基金会的工作

(1)「次世代日本研究者ワークショップ」/“下一代日本研究者工作坊”

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

海外の日本研究だけではないですが、人文社会系の博士課程の学生は、博士論文を書かないといけないというミッションから、どうしても自分の研究領域を狭く、深くしがちです。それによって得られるものは多いものの、損もあるんですね。その損の典型的な例は、孤独になってしまうこと。つまり自分しか知らない世界に入り込むので、もともと様々な対話のチャンネルがあったのが、だんだん閉まっていって、孤独な状態で研究するようになる。これは世界的な傾向だと思います。したがってその孤独な人たちの孤独感を一度振りほどいて、「健全な社会人」として研究してもらう。そういうニーズに合う企画だと理解しています。

二つ目はもう少し日本研究に関わるんですけれども、それぞれ地域によって日本研究の発展のスピードやタイミング、内容が違います。私たちは「海外の日本研究」というと、どうしても英語圏を中心に考えがちになりますが、中国には中国語で、韓国には韓国語で、インドネシアにはインドネシア語で日本研究を行っている人たちがたくさんいて、そうなってくるとそれぞれの地域で一緒のインボリュージョン――「内巻化」っていうんですけど――が起こって、研究が自分たちの周りだけに関係する形で進んでしまう。そうすると、研究は発展していくものの、先ほどの博士課程の学生と同じで、対話のチャンネルがだんだんなくなって、しまいに会話ができないといった現象が起こる。これはこれからの研究にとって、いい兆候じゃないですね。

そして第三に、私にとっての中国研究と社会学研究の関係に似ているのですが、自分たちにとってあんまり関係ないと思うことを知ることによって、自分たちが気づかなかったテーマや方法の独自性や有利性を理解することがあるのですね。つまり相手と結びつくことによって新しい発見が起こるのです。「次世代日本研究者ワークショップ」のような場で、同じ立場にいるけど違うディシプリン、違う国にいる人が出会って初めてわかることです。私たちが学生だった頃は、国際学会に出て行って、全然話が通じなく

て、報告はできたんだけど質疑応答ができなくて困って、そこから考え始める、というのが一般的な形でした。「次世代日本研究者ワークショップ」の場合、これからの日本研究を背負っていくと思われる人を各地域の各機関から集めているので、彼らには当然広い視野が求められます。また、違う領域の研究に接することで自分の研究の意味を見出し、他者と連携することで新しいことを見つけてもらいたい。タコつぼにこもっているんではなく、「健全な社会人」として、みんなと協働することによって新しい問題を見つける、そういう場としてワークショップがあると理解しています。

「次世代日本研究者ワークショップ」を運営してよく感じるのですが、中国の学生には「言語」と「問いの立て方」に大きな特徴があるように思います。

まずは、日本語能力が非常に高い。したがって、日本語でのやり取りになった時に、イニシアチブをとる可能性が非常に高い。

第二に、中国やインドネシア、インドといった人口も国土も大きいところには、独自の知的な文脈があって、良くも悪くも、日本や海外の日本研究をあまり意識しない、つまりは自分たちの知的空間を強く意識した問題の立て方をする傾向にある。たとえば中国の学生諸君は、中国にひきつけた日本に対する関心――日中関係や日本への中国文化の影響とかですね――自分たちが育った知的環境を日本研究に投影する傾向がある。これに対して、東南アジアの比較的小さな国だと、自分たちが置かれている環境よりは、むしろ英語で発信されている日本研究の中で何が足りないか、みたいな問いの立て方をするので、問いの立て方も中国の学生諸君のそれとは異なっているところがある。

ところがこれを放っておくと、「自分たちなりの日本研究でよいのだ」って開き直ってしまう可能性があるし、中国の場合、私から見ても日本研究の発展可能性がまだまだあるので、「別に海外のこと知らなくても、中国と日本のこと知っていれば日本研究ができる」といった、ある種のガラパゴス化のようなことが起こりやすい環境がある。

「次世代日本研究者ワークショップ」では、こうした自国の知的磁場から離れ、アジアの日本研究者という、日常あまり意識をしない人たちと話をする中で、「あ、こんなことやってるんだ」、「なるほどな」って思う機会が多くあります。これは中国の学生諸君ばかりか、中国の日本研究にとっても重要な気づきだと思います。東南アジアの研究者は複数の言語を使って研究をしているケースが多いので、日本を研究する意味や意義をもう一回見直すことができるのです。

中国のプレゼンスは大きくなっていて、世界の人が中国に注目していますが、中国の日本研究となるとどうか。「中国に日本研究があるのか。でも中国語を使っているので、どんな研究をしているのかわからない」と思われる傾向がある。ところが中国から研究者が参加して「こんな研究があるんだ」と説明していただくと、まず驚かれ、中国の日本研究の存在が認知されることになる。日本語がすごくできる方が多いし、特に若い諸君は日本で学位をとった人が東南アジアの諸君に比べても多いので、英語で研究成果を出している地域の日本研究者に対して、「日本人以外で日本語を使うとこういう日本研究ができるのか」というモデルを提示してもらっているように思います。

自分の足元を見直し、何をしたらいいかを深く考えるきっかけになるいい出会いが、今後とも続くといいなと思っています。

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

(2)東アジア日本研究者協議会/“东亚日本研究者协议会”

この協議会は、事務局が毎年変わり、運営が難しい構造になっているのですが、素晴らしいなと思うのは、まず言語の問題。（日本語、英語の）どちらの言語を使ってもよくて、（報告者がその言語で）ディスカッションができない場合は、報告する人間が通訳を連れて来てもよい。AAS（Association for Asian Studies）のような大会で、英語以外のセッションを設けることは、日本研究であっても難しいですよね。（英語を習得しないといけない研究者にとって）英語を使うことが国際会議に参加する一つのメリットだとすると、そのメリットを弱めているようにも見えますが、語学のハードルが高すぎて敬遠してきた研究者にとっては、語学を越えた先にある、例えば新しい「問いの立て方」や研究領域を感じることができる。これは東アジア日本研究者協議会がもつ重要な機能です。

また若者のパネルもエンカレッジされています。申請が多く競争が激しい学会だと、若くても内容が伴わないと、パネル提案が採択されないことが多々あります。「これからの可能性」と実際のパネルのクオリティーのバランスに関しては、東アジア日本研究者協議会は明らかに前者を意識した運営をしているので、学生諸君にとって、次のステップに進むために使うことができる、ユーティリティーの高い学会になっていると思います。

もう一つ重要なのは、若い諸君が広く集まることで、大学間の交換協定のような「バイ」の関係を拡げ、広く地域として、あるいは国の集合体として何ができるかといったことを考える契機になっている点です。二国間の中で日本研究のありようや教育のやり方を考えるのではなく、ちょうど ASEAN がそうであるように、「面」となることで様々な提案が形になりやすい。二国間だとアイディアは出ても、資源の欠如などの理由でなかなか発展しにくいのが、多国間の恒常的な協議会になれば、制度化を進めることができるなど、いろいろなメリットを持っていると私は理解しています。

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

（2023 年度の大会を北京日本学研究センターが主催するということについて、）北京日本学研究センターの歴史とも関係すると思いますけれども、最初のうちは、中国側のニーズに応えるために日本語の教育を下支えするというミッションが重視されてきました。後に言語を越えた理解にシフトし、研究への支援が大事になってきた。実際、北京日本学研究センターは広大な中国における「センター」としての機能を、この 30 年ずっと追究してきたと思います。

中国のプレゼンスを考えた時に、これからは世界に打って出るというか、世界の日本研究者の人たちとの対話を進め、自分たちの研究成果を外に出す、つまり「インサイド - アウト」の知の生産を意識してやっていくべき段階に来ていると思ってます。実際、北京日本学研究センターに海外の方々をお呼びすると、多くの方は「センターのことは知らなかった」とおっしゃるものの、北京日本学研究センターの学生諸君の日本語能力を知ると「すごい」とおっしゃる。こういう、日本研究を日本語によって進めることの意味を評価してくださる研究者は、世界中にたくさんいるはずです。そういう人たちと、学生交流ぐらいから始めて、最終的には共同研究や大きなシンポジウムみたいなことをする。北京日本学研究センターは、それくらいのポテンシャルは持っていますし、やってもらわないと困ると思ってます。

そうした目標の達成のためには、東アジア日本研究者協議会のホストをするのはいい「ウォーミングアップ」になります。その次は海外の学界とコラボし、もう少し大きめの学会組織を持つことによって、海外の研究の中でのプレゼンスの向上を進めていっていただきたいなと思ってます。

４．今後に向けて/关于今后

まずは新型コロナ（ウイルスの感染拡大）が 100%ネガティブではなかったということを確認したいと思います。日本研究をやってるインドネシア大学の先生が、「古い体質をもつインドネシア大学でも博論の審査にオンラインで海外の研究者が参加できるようになった」と言ってました。たぶん世界的にそういう傾向が出てくるんだろうと思いますが、そうすると、審査は最終段階ですけれど、その前の段階で、論文の共同指導が、少なくても論理的には可能ということになる。オンラインだと海外の人に飛び込んできてもらいやすいですよね。海外の学生さんに向かって「参加したい場合はどうぞ」と呼びかければ、実質的にオンラインでの共同教育は進みます。コロナ禍によってオンラインを利用した教育が世界中に広がったため、こうしたことが可能になったのですが、こうしたインフラをどうやって使っていくかが、これからの課題だと思ってます。

最近、私が面白いなと思っているのは、自分たちの知識がどうやって作られてきたのかということを、視点を広げて考えてみること。国際交流基金の事業との関係でいうと、（国際交流基金のウェブページ）「アジア大洋州の日本研究」（注：https://www.jpf.go.jp/j/project/intel/study/overview/index.html）では、それぞれの地域を代表する日本研究者にカントリー・レポートを書いてもらったのですが、その間での「対話」が欠けた状態です。オーストラリアにはオーストラリアの日本研究の歴史があり、タイにはタイの日本研究の歴史がある。良くも悪くもそれぞれの国の発展状況をリスペクトしているわけですけど、これが交叉していない。交叉させると何が起こるか、いろいろ考えるとよいと思っています。

複製・編集を禁じます

最近読んだ本で面白かったのは、ちょっと前に出版されたアメリカの歴史学者が書いた『敵を知れ』という本で(David C. Engerman, 2009, *Know Your Enemy: The Rise and Fall of America's Soviet Experts,* New York: Oxford University Press)、アメリカ合衆国の知識人にとってソ連とは何だったのか、冷戦が生まれ、終焉することによって、アメリカ人のソ連に対する理解がどのようにできあがってきたかを、ほぼ半世紀にわたって丹念に追っかけています。この本は、何を知ることが自分たちにとって必要だったのか、そして今の時代に何が必要なのかということを考えるにはすごくいい本です。冷静な歴史研究者じゃないと書けない本ですね。

禁止复制编辑文稿内容

日本研究もいろんな地域で努力されてされている方がいるものの、自分たちの知識の作られ方を冷静に振り返ることは、あまりなされていない。しかしこれを振り返ることによって、私たちが知らないうちに――コロナによって気づかないうちにある種のインフラが出来上がっていたのと同じで――「あれ、私たち知らないうちに同じことをやってたね」と気づくことがあると思います。日本研究でも、それぞれが自分の関心のあることをやってきたものの、気づいてみたら同じ地平で、みんなが共有できるような知識を作っていたことを発見するタイミングが来るだろうと思いますし、そういうことをこれからしていくべきです。

そのためにも、「グローバル・エイジアン・スタディーズ」が目標としているように、それぞれの地域で作ってきた知識をみんなでシェアできるような、プラットフォームを作るだけじゃなくて、実質的な中身も討論できるといい。そのための研究計画を立てたり、学生の交換やプロジェクトの運営ができたりすればいい。もっとも、私も定年が近づいているので、次の世代にバトンタッチしないといけないのですけれどもね。

５．国際交流基金への期待/対日本国际交流基金会的期待

国際交流基金は、日本研究をめぐる大規模なアレンジができる、世界で唯一の組織だと思います。何より各国の有力な日本研究組織や人とつながっている。これをうまく使うことによって、それぞれの国やそれぞれが置かれた状況の中ではできない、あるいは特定の学会やディシプリンではできないことが可能となることがたくさんある。世界とつながっているという基金のアドバンテージを意識し、それを如何にうまく日本研究の中に生かしていくかを考えた方がいいと思います。

（今年は日中国交正常化 50 周年、国際交流基金設立 50 周年ですが、）「日中」というと、どうしてもバイ（二国間）で考えがちで、「中国は大きくなったが日本は大きくなっていない」といった認識枠組で考えてしまいがちになる。それは仕方がないなと思う部分がある一方で、日本でも中国でも日本研究は行われており、これが世界とつながっている。世界とつながっているという基金のアドバンテージを活かして、バイではなくてもっとマルチに広がる、そういうことを国際交流基金はおやりになっています。

僕が今回、基金の方々と一緒にアジア太平洋地域の日本研究の歴史を振り返って改めて感じたのが、アジアやヨーロッパの有力大学、ほぼすべてに日本研究のプログラムがある点。これはすごいことです。アメリカ研究の組織を他の国が持っているか、オーストラリア研究プログラムを世界中の大学が持っているかというと、そんなことはない。それだけ日本は理解しづらいのかもしれませんが、日本は知るに値する国だと思われてきたことは確かです。

しかも国際交流基金自身が、こうした動きを支援してきました。世界各地の有力な知の生産現場に、日本を理解するプログラムを作りこんできたということは、大きな財産だと思います。それぞれの地域を代表する知を作っている大学に日本研究のプログラムがあるって、ものすごく胸を張れる。これを維持するだけでも大変ですが、日本研究を通じて世界がつながっていることに、多くの人々が深い理解をしてくれるといいですね。「日中」もこれから「世界の中の日中」であることを意識してほしいと思いますし、私自身も、これを強く意識した活動をしていきたいと思っています。

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

公開：2023 年 6 月 15 日